



このお便りは、横浜市の「架け橋プログラム」の一環として発行しています。
架け橋期の保育・教育の充実のために、みなさんの取組に生かしてください。

嶋野道弘先生のご講演より (4)

テーマ “やってみたい・やりたい”を伸ばす保育・教育
～自己発揮と子どもの育ち～ 「参加者の声」

参加者の皆さんのアンケートには、横浜の子どもたちの未来に向けた言葉であふれていました。幼保小の先生方で共有することで、架け橋期の理解が広がり、子どもを真ん中に、子ども自身が生き生きと学び、育つ環境を皆で創っていきましょう。嶋野先生、ありがとうございました。



♡印象に残った言葉は、「**子どもをまるごとみる (ありのままに)**」ということです。

「**見取り**」という営みには、推測・推量・推察という得られた情報から推しはかることが大切だということに改めて気づくことができました。時間がないと、その場でつい事実のみを確認して終わってしまうことも多々ありますが、たしかに、「おや？今の発言はどこからきたのかな？」などふと立ち止まってみると、思わぬ楽しい展開に進むことができることがよくあるからです。子どもの**行動を肯定的にとらえて**いけるように今一度気持ちを入れ直したいです。(小)



♡子どもたちが生き生きと活動し、**学びを深めることができる根底に、安心感が不可欠**だということ。また、教師は子どもたちの見えている姿だけでなく、その**行動や発言がうまれた背景や心の動きを推測し、肯定的に見取っていく**ことが大切だということを学びました。(小)



♡日々悩みながら保育しているが、悩むことは悪くないんだと思えた研修だった。あさがおの事例で担任の先生は自分の対応について悩み、それについて「**優れた教師はジレンマに目を背けない**」という話を聞き、ジレンマを感じる心を忘れてはいけなと強く思った。(小)

♡優れた保育士・教師は、**ジレンマに背を向けない**とおっしゃられていたのが残っています。保育士も日々、**葛藤していいんだ**と思いました。(保)

♡「子どもを見る」とは単に行動を観察することではなく、その**行動の背景にある思いや興味・関心を理解しようとする姿勢**が大切なのだと感じました。私は幼稚園教諭として日々子どもたちと関わっていますが、子どもが何をしているかを見るだけで終わってしまうこともあります。しかし本当に必要なのは、なぜその遊びに夢中になっているのか、何に心を動かされているのかを考えることなのだと思います。また、**事実を多面的に捉え、推測し、解釈するという行程は、子ども理解を深めるために欠かせない視点**だと感じました。これからは子どもの世界にもっと入り込み、一人ひとりの思いに寄り添いながら保育をしていきたいと思っています。(幼)



♡レジュメの合間で先生が仰っていた「**主観を恐れてはならない**」「主観は対象と自分を近づける行為である。その代わり主観が一つではいけない。間違えてしまうから」「客観は対象と自分を切り離す行為である」という言葉が特に印象に残りました。児相勤務に4年間従事してきたが、その後で自分自身の子どもへの接し方に変化を感じている部分が言語化されているように感じられました。見ただけでは分からないことを分かろうとする、見取りのできる保育者でありたい。(保)

これからの実践に生かして
いきましょう